13 複 式 教 育

豊かな感性を育む集会活動
── たてわり集会活動「たんぽぽ集会」の実践を通して ──

複式プロジェクト

1．複式教育における「豊かな感性を育む」とは

(1) はじめに

本校では，今まで「個が生きる複式授業」実現のために，複式少人数学級の特性をよさとして生かしていく教育の研究を進めてきた。昨年度は，特に「複式のよさを感じ生かしていこうとする関心・意欲・態度の育成」を重点課題として取り組んできた。その結果として，次のような成果が得られた。(平成４年度本校研究紀要ｐ．181～182)

① 確かな個の育成（自己教育力の育成）

少人数であるため，児童一人一人に目が行き届き，また，個の活動が十分に保障され，確かな学力が身につく。異学年集団であるため，教科によっては，自分たちで学習を進める間接指導の場があり，それを通して，自学自習の態度が育成される。

複式学級の子どもたちは，朝の会の活動から教師の支持がなくても，定刻になれば，自分たちで開始する。また，授業に対しても，同様である。教師がなんらかの都合で授業に遅れたり，間接指導からの授業スタートの場合でも，話し合い・本読み・計算カード・歌等の学級での活動や，本時の課題・視写・漢字練習・計算練習などの個人での活動が徐々にできるようになっている。

② 豊かな人間形成（自他を思いやる態度の育成）

子どもたちは，上学年時代と下学年時代を交互に経験する。そのようなかかわりの中で，上学年は下学年のよきリーダーとして，下学年は上学年のよき協力者として学び合っていく。また，少人数で６年間ほぼ同じメンバー構成であるために，子どもたちは成長と共に相互に長所も短所も理解し合っていける。このような豊かな人間関係の中で，自他を思いやる態度が育ってきている。

このように，複式少人数の特性のよさに気付き，そのよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度を育てていくことにより，子どもたちに自己教育力や自他を思いやる態度が育ってきている。

このように，複式少人数学級の特性のよさに気付き，そのよさを生かしていこうとする関心・意欲・態度を育てていくことにより，子どもたちに自己教育力や自他を思いやる態度が徐々に育ってきている。しかしながら，活動の多くは教師から気付かせるものであり，子どもたち自ら「感じ・気づき」より価値あるものを見いだす活動へと高まるにはいたっていない。

本年度は，そういった残された課題を踏まえ，さらに活動を発展させ，子どもたち自身の力で複式学級のよさを創り出していくことができるようにしていきたいと考えている。

(2) 複式教育を通して育まれる感性とは

複式学級の特性は,「少人数の学級構成」「異学年集団による学級構成」にある。この特性のよさを生かすことにより次のような感性の育成が期待される。

① 相手の立場や気持ちを尊重する感性

（異学年集団という特性のよさを生かす）

複式学級は，年齢を越えたより社会に近い集団といえる。同学年集団の生活だと，当り前の事として受け入れられていたことも，異学年集団の中ではそれが通用しないこともある。同学年の中では積極的でない子どもでも，上学年という立場だとリーダー性を発揮して活動しなければならない。同学年での気楽な言葉づかいが，異学年集団の中ではそのまま使えないこともある。上学年は，

下学年とのふれ合いから，かつての自分の姿を重ねて，いたわりの態度で接するようになる。また，成長した今の自分に気付く。下学年は上学年がいるからこそ活動ができることに気付き，喜びを感じ，自らも学ぼうとする。また，将来あるべき自分の姿を思い浮かべる。

このようなかかわりを通して，異学年だからこそできる活動のよさに気付くとともに，年齢にかかわらず，個と個のつながりとして相手の立場を思いやる感性が育つと期待できる。

② 感じたこと・自分の思いを豊かに表現できる感性

（少人数という特性のよさを生かす）

少人数であるため，一人一人がより多くの活動を体験できる。つまり，自分の気持ちや考えを表現する機会に多く恵まれることになる。例えば，単式学級だと，１日の中で１回も発表できないこともあるが，複式学級では，何度でも発表できる。このような多くの表現活動の積み重ねを通して自分の思いを豊かに表現できる感性が育つと期待できる。

①，②をまとめてとらえると,「人と豊かにかかわっていける感性」を複式教育を通して，育むことができるといえよう。

２．豊かな感性を育むための取り組みの重点

① 複式全体での集会活動を子どもたちの力で創造させていくことを体験させれば，複式のよさに気づき，相手の立場を思いやる感性や，感じたことを豊かに表現できる感性が育つであろうと考える。本年度の主な集会活動の年間計画を，昨年度の実践をもとに次のように立てた。

４月　１年生を迎える会

５月　複式学級のシンボルマークを作ろう
　　「たんぽぽ」に決定

６月　複式学級の歌を作ろう
　　第１回集会活動
　　「たんぽぽ発表会：音楽発表会」

７月　第２回集会活動
　　「たんぽぽ集会：屋台祭り」

10月　第３回集会活動
　　「たんぽぽ発表会：音読発表会」

11月　第４回集会活動
　　「たんぽぽ集会：いもパーティ」
　　第５回集会活動
　　「帝釈小学校と友達になろう
　　：ビデオを送ろう」

３月　「たんぽぽ集会：６年生を送る会」

←
屋台祭り
（７月19日）

→
音読発表会の練習
（10月）

② ティームティーチングにより教師の感性を生かす

子どもたちの力で複式学級のよさを創り出していくことができるようにしていくためには，複式学級のよさを生かしていくことに着目した肯定的評価をしていくことが大切である。できばえのよしあしよりも，自分たちの手で取り組もうとする活動の過程を重要視する。そのために，ティームティーチングによって，評価の観点を分担したり，教師自身の持つ感性を生かし，子どもと豊かにかかわっていくことが大切である。

3．活動の実践

(1)　1年生を迎える会

複式学級では，全校行事に先立って，1年生を迎える会を実施した。複式学級の実状は，一般的にはあまり知られておらず，そんな学級に入る子どもたちに不安な気持ちがあることは，容易に想像できる。そこで，複式全体で1年生を迎える行事を行うことによって，安心感を与えておくことは，今後の活動にスムースに入っていくために必要なことであると考えた。

4月 16日〈金〉

その時、私は"しかい"になりました。
今まで、"しかい"になったこともあったけど、
上の年の人がいました。
けれど、もう卒業してしまったので、
上の年の人がもういません。
だから、こまりました。
なかなか、思うとおりに出来きませんでした。
さわがしくなれば、どなったり、あき5めたり
していました。
本当にむずかしいことを知りました。

在校生にとっても，複式に迎える1年生と対面することは，楽しみなことのようである。複式高学年（以後複高と略す）の子どもたちが主体となって会を進めていったが，やや緊張感の流れる中，なごやかなムードの会であった。6年生にとって，会を進める難しさを知ったことは，今後の会に対しての心構えを作る上で有意義であった。

(2)　交流給食

1年生から6年生までが，一同に会して給食をとることは，複式だからこそできることである。上級生にとって，この時間は，指導者としての立場を余儀なくされる。そのため，食事に関して，わがままを言うことはできない。下級生はそんな上級生の姿を見て，好ききらいなく食べることを学んでいくという指導的効果も期待できる。

第1回の交流給食では，複式のシンボルマークが発表された。複式がひとまとまりになって，共通の目標のもとに，それぞれの役割を自覚しながら活動していこうという意識を高めるために設けたのである。子どもたちから募集したものの中から「明るさ」「強さ」「まとまり」というイメージが複式によく合っているという理由で「たんぽぽ」が採用された。

4月30日〈金〉

4月30日に複式のシンボルマークを発表しました。
たんぽぽにきまりました。
そのたんぽぽは、にこにこわらっていました。すこしかわい
いです。
初めてチームが決まったのでうれしかったです。女子は2人
男子は4人でした。自己しょうかいをしました。すこしだけきん
きょうしました。それでもたのしかったです。
次の時もたのしくしたいです。

マークのデザインは複高の児童が担当した。

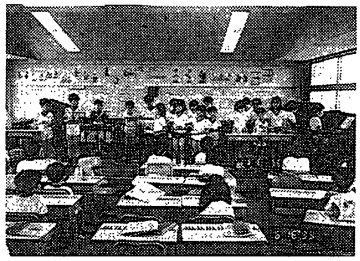
(3)　たんぽぽ発表会

「たんぽぽ」という名称が誕生してから，最初の活動が「たんぽぽ発表会」である。複式学級の子どもたちは，ふだん多人数の前で発表する機会が少ないので，発表力を鍛えていくことが難しい。また，場慣れしていないために，多人数の前では，引っ込み思案になってしまうことが多い。それらを克服するために，表現力を伸ばすことは，複式学級の抱える課題である。

そこで，自分たちで工夫した音楽発表会をすることによって，表現することの楽しさを味わわせ，人前で発表することに抵抗をなくしていきたいと考えた。この発表会は，特別活動の授業として実施したが，いきなりできるものではないので，それまでの話合いや練習の時間が必要であった。

異学年の子どもが集まって活動することには，比較的慣れている複式の子どもたちではあるが，複式全学年の縦割の活動には新鮮味があるのか，どの子も意欲的に練習に取り組んでいた。高学年の子どもたちは，下級生に対して，ふだん見せない気配りをしながら，仲良く練習ができるように心がけていたようである。楽器につ

いては，それぞれのグループで工夫したものを使った。音楽室にある楽器だけでなく，空かんやコップなど，その使い方にグループの特色が表れており，楽しさをより高めることができた。自分たちの力で活動を作ることの楽しさを，子どもたちは，感じ始めていたようだ。



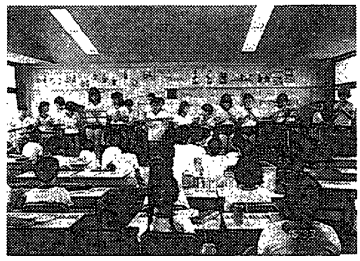
発表会当日は，研究会の授業として位置づけていたので，やや特殊な状況のもとで実施されたが，子どもたちは以外にものおじせず，生き生きと活動することができた。低学年にとっては上級生のお兄さんやお姉さんがついていてくれるという安心感があり，逆に高学年には，下級生の前でしっかりしなくてはならないという自負心があったためではないかと思われる。その中で，知らず知らずのうちに，上級生は下級生へのいたわりの気持ちを抱き，下級生は上級生への信頼感を抱くようになると考えている。

6月　19日（土）

まちにまったたんぽぽ発表会がやってきました。ほんまでいっぱい練習し，がんばったので成功すればいいなと思っていました。私はオルガンをしました。ときどきまちがえたけど，うまくいったのでよかったです。

私は，Aグループのおやこどんぶりがあかるくていいなと思いました。Bグループは手づくりの楽器をいっぱいつかっていてすごいなと思いました。こんどもこんなたのしい会があればいいなと思いました。

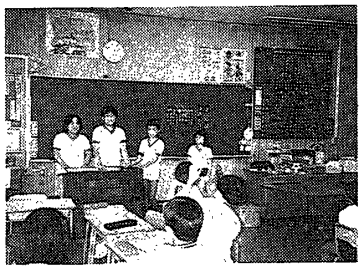
このような経験を重ねながら，子どもたちは，それぞれの学年に応じた自覚を持ち，表現力を発揮することができるようになる。



教師が一つ一つ指導するまでもなく，子どもどうしのかかわりの中で，そのような力が育っていくことは，まさに複式のよさである。

(4) たんぽぽ集会（屋台祭り）

1学期のまとめとして，企画の段階からすべて子どもに任せた集会活動を行うことにした。予想に違わず，子どものいちばん好きなことは「食べ物」である。子どもの希望をかなえながら，そのことを通してどんな力を育てていくかということを配慮して実施に踏み切った。そこで，この活動を通して，次のような能力を育てていきたいと考えた。



① 主体性 …… 自分たちの力で進めよう。
② 計画性 …… 調理の計画を立てよう。
③ 協力性 …… グループで協力しよう。
④ 創造性 …… アイデアを生かして楽しもう。

これらの能力は，社会生活に必要なことである。小学校でのこのような経験が，子どもたちの将来に生かされることだろう。

子どもたちは，完成されたメニューは知っていても，その作り方は知らないことが多いものである。そこで，家族の方によき相談相手として協力してもらうようお願いした。その中で，親子の会話が生まれ，親子のよいかかわりがさらに深まることを意図した。このように家庭生活も活動に含めて考えた。

子どもたちの企画で注目すべきは，ただ食べ物を作って食べるだけでなく，屋台を作って，友だちにもふるまおうというところである。そのことで交流の輪が広がることは言うまでもない。後日，教師の指導で，養護学級の友だちやお世話になった専科の先生方にも声をかけることにしたが，このような，視野を広げた考え方も，子ども自身ができるようになってほしいと考える。

実戦の中で見られたよいかかわりの姿は，次のようなことである。

① 学年間のかかわり

調理に関しては，高学年の子どもが，ある程度知識や技術をもっている。1年生にとっては，刃物や火を扱うことは初めての経験であることが多い。自然に6年生が1年生について，優しく教えている姿が見られた。

② グループ間のかかわり

それぞれが工夫を凝らしたメニューを作りながら，他のグループのメニューを味わって参考にしたり，忘れた材料を借りあったりしながら，仲良くかかわる姿があった。

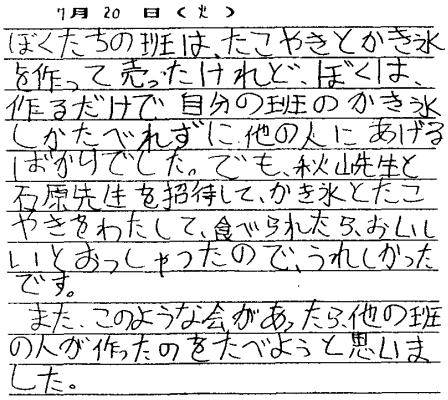
③ 学級間のかかわり

複式学級と養護学級はこれまでも，学校行事の中でかかわりを持ってきているが，複式の子どもが作った活動の中でのかかわりは，これが初めてである。養護学級の友だちとかかわることはうれしいらしく，楽しみにしていたようだ。

④ 対教師のかかわり

自分たちが企画した会に，人を招待し喜んでもらうということは，子どもの発想では，なかなか出てこないことである。しかし，人のためにつくすことの喜びを味わうこともまた貴重な体験である。この機会に，そのような発想で会を開くこともあるということを理解させたい。

これらのかかわりは，社会での人間関係の縮図であるということができる。子どもたちは，会を楽しみながら，知らず知らずのうちに社会性も身につけているのである。


7月 20 日（火）

ぼくたちの班は、たこやきとかき氷を作って売ったけれど、ぼくは、作るだけで自分の班のかき氷しかたべれずに他の人にあげるばかりでした。でも、秋山先生と石原先生を招待して、かき氷とたこやきをわたして、食べられたら、おいしいとおっしゃったので、うれしかったです。

また、このような会があったら他の班の人が作ったのをたべようと思いました。

今回は，自分たちが作った食べ物を人にふるまうことが多く，自分が十分に味わえなかったことを心残りに思う子どももいた。ただし，人に喜んでもらうことがうれしかったという感想も多く，自分の欲求にとらわれない，レベルの高い楽しみ方ができた子どもも多かったようである。今後の活動に生かしていきたいと考えている。

3．豊かな感性を育む活動へ

複式学級にとって，「たんぽぽ」という旗印ができたことは，ひとつの変革である。「たんぽぽ」という名がつけば，いつでも複式学級がひとまとまりになれるのである。また，全校的に複式学級の活動をアピールしていくためにも，複式共通の名称があることは都合がよい。「たんぽぽ」が複式の子どもたちの「やる気」や「やりがい」の象徴として定着していくように，今後も活動を展開していきたい。

今年度は，「複式のよさを生かす活動」から「複式のよさを創り出す活動」へ，行こうしていく過渡期であるととらえている。そのため，これまでになかった新しい試みもしていきたい。子どもたちにもそのようなことを話しながら，柔軟な発想で主体的に活動できる子どもを育てたいと考えている。子どもたちの能力面に加え，情意面も，複式学級の特性を生かしながら，育てることができると考えている。学年間・学級間の交流を積極的に行うことで，相手の立場になって考える心情を育てることができる。また，少人数の機動性を生かして，奉仕的な活動を行うことで，人のため，社会のためにつくす喜びを味わったりすることも大切なことである。そのような活動を通して豊かな心を育てることにも取り組んでいきたい。

4．授業研究「第２回たんぽぽ発表会をしよう」から

(1) 授業の展開

はじめの言葉

はじめの言葉の係の「今日はみんなが待ちに待ったたんぽぽ発表会です。みんなで作る会なので一生懸命頑張って楽しい会にしましょう。」の言葉で会が始められた。

『たんぽぽの歌」を歌う

たんぽぽは，複式学級のシンボルになっており，『たんぽぽの歌』は複式学級のテーマソングになっていて，たんぽぽ集会やたんぽぽ発表会など，複式で集まったときはいつも歌っている。今では三つのクラスがそれぞれ替え歌にして自分のクラスのテーマソングにしている。

発表方法の説明

ステージ係によって発表方法の説明がおこなわれ，次の班は準備しておいて，出入りを素早くすることが伝えられた。

めあての確認

進行係によって「感じを込めて堂々と読もう」と「下級生にも学ぼう」のこの集会のめあてが確認された。

発表

六つの班が順に発表する。ほとんどの班が練習をしていくうちに自分の分担しているところを覚えてしまったり，暗唱することによってより感じを込めることができることに気付いたりするなどして，暗唱する形となってプリントを見ないで発表する児童が多かった。

発表について振り返る

振り返るポイントとして，どのグループの誰のどんな所がよかったかなど，具体的に自分のグループで頑張ったことや他のグループでよかったことは何かなどを話し合う。

班で話し合ったことの発表

「気持ちを込めて読んでいた。」「大きな声で読んでいた。」「堂々と読んでいた。」「一生懸命読んでいた。」「下級生の声が大きくてよかった。」下級生に学ぶこととして，「家で練習したり学校でも残って練習していたのでよかった。」「プリントを見ずに発表していた。」「熱心に発表を聞いていた。」など，他のグループのよかったことを発表した。

先生のはなし

「係の人が頑張っていた。」「司会の人が自分で考えて進めていた。」「自分で考えて並んで発表を待つ。」「姿勢がよかった。」「練習をしっかりしていたので自信を持って取り組んでいた。」「発表する人の方を向いて発表を聞いていた。」「上手になった。」「一番取り組みが後れていた班が一生懸命練習したのできちんと発表できた。」など，教師側からプラスの評価がなされた。

終わりの言葉

「たんぽぽ発表会のめあて通りできましたか。これからもがんばりましょう。」の言葉で会は終わった。以上進行はすべて司会の児童によって進められた。

発表会を終えた後，全員に対して，感想の記述をしてもらった。

～読みながら感じたこと～

複低・・どきどき…／じょうずに読めた／○○さんがなかなかったからよかった／どうどうと大きな声で…よかった／覚えているかな／はやく順番がこないかな／おぼえているかな／
複中・・失敗したらどうしよう／大きな声で読めた／あぶらあせが／みんなに伝わったかなあ……まちがえないで読めたかな／など
複高・・少し緊張／下を向いてしゃべりすぎ／ピアノがおくれたけど，みんなちゃんと合わせた／けっこううまく／など

～友達の発表を聞いて感じたこと（概容）から～

複低・・みんなはっきりと大きな声で／姿勢がよくてほめられた／みんなじょうず／（内容として）自らのがんばりや緊張・楽しさを記述した感想多数
複中・・みんなすごく上手／○○はんは，声に気をつけて…○○はんは，きれいな声で／（内容として）集団活動の意欲をのびのびと表現した感想多数
複高・・○○君の司会や○○君の声が大きくてよかった／（内容として）自分のグループの下学年児童への配慮や達成感の高まりを評価する感想多数

⑵　成果と課題～複式の特性を生かして感性を育む～

①　異学年集団の中で相手の立場を思いやる感性を育てるという視点から

◇高学年児童（以下「児童」を省く）が平素より音読に意欲的であった。

下級生への手本になろうという責任感
◇低学年が物おじせず，のびのびと発表できた。　――相乗効果
上級生がついていてくれるという安心感

◇下級生をかげで支えながら，活動を進める６年生。

◇下級生の頑張りを認める評価が多く出た。

◆低学年にとって，上級生の前で反省を発表することは，勇気が必要であり，自分の思いを伝えることは難しい。（２年生児童の発表が止まってしまった。）

◆高学年の何気ない言動が，低学年に重くのしかかることがある。
（練習の際,「声が小さいよ」「間違いをまねる」などのために「傷ついた」「泣いてしまった」児童がいた。）

◆表向きだけ面倒を見るのではなく，低学年の立場や気持ちを思いやりながら，活動を進めるための指導が高学年に必要であった。

②　少人数を生かし，より多くの表現の場を設定できることについて

◇各自が自分なりの練習方法を工夫でき，個に応じた表現力が育つ。

◇自分なりのめあてができ，より意欲的に取り組むことができる。

◇個の活動に目を向けた評価ができる。（教師・児童とも）

◆個の能力差がはっきりするため,不安になる児童がいた。（声が小さい,読み誤りが多いなど）それを個性ととらえ，個に応じた教師の指導・支援または，児童間の支え合いの態度の育成が必要であった。

③　ティームティーチングの形態について

◇多面的な見方から，指導・支援ができた。（係，発表者，聞き手の側に立って）

◇担任の立場から，それぞれの学年に応じた評価ができた。

◆教師間の連係が不足していた。（打ち合わせ時間が十分に確保できなかった。）

◆授業の流れによっては，臨機応変な対応が必要であった。（グループでの話し合いの際，どのグループにつくかなど）

《参考資料》

活動の経過と展望

10月５日　縦割グループ決定
　　交流弁当会
10月６日　第１回グループ練習
　　「大きな声ではっきりと読もう」
10月12日　題材決定
10月13日　第２回グループ練習（国）
　　「役割を決めて読もう」
10月14日　第３回グループ練習（国）
　　「感じを込めて読もう」
10月16日　第４回グループ練習（国）
　　「まとめの読みをしよう」
　　○中間発表会
10月18日　第２回たんぽぽ発表会
　　各学級で振り返り

学習過程　　◎…感性にかかわる支援活動

児童の学習活動	教師の指導・支援活動	資料
1　開会する。 ・「たんぽぽ」を歌う。(歌係) ・あいさつ　　(始めの言葉係) ・発表の方法説明（ステージ係）	1　進行は司会の判断による。 ◎子どもたちの緊張をほぐし，伸び伸びと発表できる雰囲気を作るために，歌を取り入れる。 ・係の子どもから，主体的な活動をするための自覚をうながす言葉がでるように事前に指導する。 ・係の支援，発表者の支援，聞き手の支援を分担して行う。	
2　めあての確認をする。(司会)	2　全体でめあてを確認し，活動の心構えを作らせる。 ◎司会の指揮で声に出して，めあてを意識させるようにする。 ・感じをこめて堂々と読もう。 ・下級生にも学ぼう。	めあてカード
3　音読発表をする。 「かわいそうなぞう」 ・斉読 ・群読 ・個人読み ・暗唱	3　一つの物語を，グループがリレー形式で読み継いでいく。 ◎グループの工夫を肯定的に，観察し評価の参考とする。 ・作品としての完成度よりも，子どもの活動の活性度を重視する。	
4　発表について振り返り，評価し合う。 ・自分たちの発表でうまくできたこと。 ・他のグループから学んだこと。 ・下級生から学んだこと。	4　自己評価と相互評価を行わせる。 ◎相互評価は特に，下級生に対して，そのよさを発表させ，下学年の子どもに意欲を持たせることで，今後の活動につないでいくようにする。 ◎よい意見と感じたら，自然に拍手が出るように，教師も評価の輪に加わるように心がける。	
5　先生の話を聞く。 ・自分で（主体性） ・力を合わせて（協力性） ・楽しく（創意工夫） ・役目を果たす（責任ある態度）	5　三人の教師が分担して，それぞれの支援の立場から，子どもたちの活動を評価する。 ◎係の子どもへのねぎらいの言葉がけに留意する。	
6　閉会する。 ・あいさつ　(終わりの言葉係)	6　音読や読書への意欲付けとなるような言葉を含めさせる。	